

二〇二三年五月五日

強風に尾もちぎれんと鯉のぼり
一條の瀧 湿原の水集め

疾風のごと土手かすめ燕来ぬ
新幹線水田を疾駆するごとし
苑若葉ピアスのパパが嬰を抱く

二〇一三年五月四日

水打つて風の生まるる石畠
鯉のぼり高しイベント睥睨す
古墳へと道しるベ立つ花壇
異国訛り交じる町内溝浚へ
一〇一三年五月三日

渓谷の樹間をつづる山つつじ
天つ藤匂帳に屑をこぼしけり
海見ゆる窓辺に旅の春惜しむ
遊園地子らを見守る春日傘
ジャスミンの香や洗濯も苦にならず
喬木の森の小道の新樹光

大蟻と睨めつこせる園児かな
藤の肩払ひて座るベンチかな
老い母の受洗祝ぐやに春の星
囁りが天蓋なせる遊歩道
晨朝の森の間遠に鹿の笛

澄満せむも よせい愛はくはん みき宏 明日香 あひる 素 よえ秀 かえる
子天いじべこ シ子正子 お虎 香お 素 よえ秀 かえる

二〇一三年五月一日

お披露目の花嫁に添ふ若葉風
二〇二三年四月三〇日

二〇一三年四月二九日

長堤を自転車通勤風薫る
農に就く子の逞しき日焼かな
春愁や老の恙を持て余し
白杖の人藤房に触れて愛づ
山頂の崖下樹海をなす若葉
紅白の間の子も咲く庭躑躅

毎日句会みのる選・二〇一三年五月七日